野呂松人形

芥川龍之介

野呂松人形（のろまにんぎょう）を使うから、見に来ないかと云う招待が突然来た。招待してくれたのは、知らない人である。が、文面で、その人が、僕の友人の知人だと云う事がわかった。「K氏も御出（おいで）の事と存じ候えば」とか何とか、書いてある。Kが、僕の友人である事は云うまでもない。――僕は、ともかくも、招待に応ずる事にした。

野呂松人形と云うものが、どんなものかと云う事は、その日になって、Kの説明を聞くまでは、僕もよく知らなかった。その後、世事談（せじだん）を見ると、のろまは「江戸和泉太夫（いずみだゆう）、芝居に野呂松勘兵衛（のろまつかんべえ）と云うもの、頭ひらたく色青黒きいやしげなる人形を使う。これをのろま

人形と云う。野呂松の略語なり」とある。昔は蔵前（くらまえ）の札差（ふださし）とか諸大名の御金御用とかあるいはまたは長袖とかが、楽しみに使ったものだそうだが、今では、これを使う人も数えるほどしかないらしい。

当日、僕は車で、その催しがある日暮里（にっぽり）のある人の別荘へ行った。二月の末のある曇った日の夕方である。日の暮には、まだ間（ま）があるので、光とも影ともつかない明るさが、往来に漂（ただよ）っている。木の芽を誘うには早すぎるが、空気は、湿気を含んで、どことなく暖い。二三ケ所で問うて、漸（ようや）く、見つけた家は、人通りの少ない横町にあった。が、想像したほど、閑静（かんせい）な住居（すまい）で

もないらしい。昔通りのくぐり門をはいって、幅の狭い御影石の石だたみを、玄関の前へ来ると、ここには、式台の柱に、銅鑼が一つ下っている。そばに、手ごろな朱塗の棒まで添えてあるから、これで叩くのかなと思っていると、まだ、それを手にしない中に、玄関の障子のかげにいた人が、「どうぞこちらへ」と声をかけた。

受附のような所で、罫紙の帳面に名前を書いて、奥へ通ると、玄関の次の八畳と六畳と、二間一しょにした、うす暗い座敷には、もう大分、客の数が見えていた。僕は、人中へ出る時は、大抵、洋服を着てゆく。

袴（はかま）だと、拘泥（こうでい）しなければならない。繁雑な日本のétiquette も、ズボンだと、しばしば、大目に見られやすい。僕のような、礼節になれない人間には、至極便利である。その日も、こう云う訳で、僕は、大学の制服を着て行った。が、ここへ来ている連中の中には、一人も洋服を着ているものがない。驚いた事には、僕の知っている英吉利人（イギリスじん）さえ、紋附（もんつき）にセルの袴で、扇（おうぎ）を前に控えている。Ｋの如き町家の子弟が結城紬（ゆうきつむぎ）の二枚襲（にまいがさね）か何かで、納まっていたのは云うまでもない。僕は、この二人の友人に挨拶をして、座につく時に、いささか、étranger の感があった。

「これだけ、お客があっては、――さんも大よろこびだろう。」Kが僕に云った。――さんと云うのは、僕に招待状をくれた人の名である。

「あの人も、やはり人形を使うのかい。」

「うん、一番か二番は、習っているそうだ。」

「今日も使うかしら。」

「いや、使わないだろう。今日は、これでもこの道のお歴々(れきれき)が使うのだから。」

Kは、それから、いろいろ、野呂松人形の話をした。何でも、番組の数は、皆で七十何番とかあって、それに使う人形が二十幾つとかあると云うような事である。

自分は、時々、六畳の座敷の正面に出来ている舞台の方を眺めながら、ぼんやりKの説明を聞いていた。

舞台と云うのは、高さ三尺ばかり、幅二間ばかりの金箔を押した歩衝である。Kの説によると、これを「手摺り」と称するので、いつでも取壊せるように出来ていると云う。その左右へは、新しい三色緞子の几帳が下っている。後は、金屏風をたてまわしたものらしい。うす暗い中に、その歩衝と屏風との金が一重、燻しをかけたように、重々しく夕闇を破っている。――僕は、この簡素な舞台を見て非常にいい心もちがした。

「人形には、男と女とあってね、男には、青頭とか、文字兵衛（もじべえ）とか、十内（じゅうない）とか、老僧とか云うのがある。」

Kは弁じて倦まない。

「女にもいろいろありますか。」と英吉利人（イギリスじん）が云った。

「女には、朝日とか、照日（てるひ）とかね、それからおきね、悪婆（あくば）なんぞと云うのもあるそうだ。もっとも中で有名なのは、青頭でね。これは、元祖から、今の宗家へ伝来したのだと云うが……」

生憎（あいにく）、その内に、僕は小用（こよう）に行きたくなった。

――厠（かわや）から帰って見ると、もう電燈がついている。そうして、いつの間にか「手摺り」の後（うしろ）には、黒い紗（しゃ）

の覆面をした人が一人、人形を持って立っている。

いよいよ、狂言が始まったのであろう。僕は、会釈（えしゃく）をしながら、ほかの客の間を通って、前に坐っていた所へ来て坐った。Kと日本服を来た英吉利人との間である。

舞台の人形は、藍色の素袍（すおう）に、立烏帽子（たてえぼし）をかけた大名である。「それがし、いまだ、誇る宝がござらぬによって、世に稀（まれ）なる宝を都へ求めにやろうと存ずる。」人形を使っている人が、こんな事を云った。語と云い、口調と云い、間狂言（あいきょうげん）を見るのと、大した変りはない。

やがて、大名が、「まず、与六（よろく）を呼び出して申しつけ

よう。やいやい与六あるか。」とか何とか云うと、「へえ」と答えながらもう一人、黒い紗で顔を隠した人が、太郎冠者（たろうかじゃ）のような人形を持って、左の三色緞子の中から、出て来た。これは、茶色の半上下（はんがみしも）に、無腰（むごし）と云う着附けである。

すると、大名の人形が、左手（ゆんで）を小さ刀（がたな）の柄（つか）にかけながら、右手（めて）の中啓（ちゅうけい）で、与六をさしまねいで、こう云う事を云いつける。——「天下治まり、目出度い御代なれば、かなたこなたにて宝合せをせらるるところ、なんじの知る通り、それがし方には、いまだ誇るべき宝がないによって、汝都へ上り、世に稀なるところの宝

が有らば求めて参れ。」与六「へえ」大名「急げ」「へえ」「ええ」「へえ」「ええ」「へえさてさて殿様には……」――それから与六の長い Soliloque が始まった。

人形の出来は、はなはだ、簡単である。第一、着附の下に、足と云うものがない。口が開いたり、目が動いたりする後世の人形に比べれば、格段な相違である。手の指を動かす事はあるが、それも滅多にやらない。するのは、ただ身ぶりである。体を前後にまげたり、手を左右に動かしたりする――それよりほかには、何もしない。はなはだ、間ののびた、同時に、どこか鷹揚な、品のいいものである。僕は、人形に対して、

再び、étranger の感を深くした。

アナトオル・フランスの書いたものに、こう云う一節がある、――時代と場所との制限を離れた美は、どこにもない。自分が、ある芸術の作品を悦ぶのは、その作品の生活に対する関係を、自分が発見した時に限るのである。Hissarlik の素焼の陶器は自分をして、よりイリアッドを愛せしめる。十三世紀におけるフィレンツェの生活を知らなかったとしたら、自分は神曲を、今日（こんにち）の如く鑑賞する事は出来なかったのに相違ない。自分は云う、あらゆる芸術の作品は、その製作の場所と時代とを知って、始めて、正当に愛し、かつ、

理解し得られるのである。……

僕は、金色（こんじき）の背景の前に、悠長な動作を繰返している、藍の素袍（すおう）と茶の半上下（はんがみしも）とを見て、図（はか）らず、この一節を思い出した。僕たちの書いている小説も、いつかこの野呂松人形のようになる時が来はしないだろうか。僕たちは、時代と場所との制限をうけない美があると信じたがっている。僕たちのためにも、僕たちの尊敬する芸術家のためにも、そう信じて疑いたくないと思っている。しかし、それが、果して、そうありたいばかりでなく、そうある事であろうか。……

野呂松人形は、そうある事を否定する如く、木彫の

白い顔を、金の歩衝の上で、動かしているのである。
狂言は、それから、すっぱが出て、与六を欺し、与六が帰って、大名の不興を蒙る所で完った。鳴物は、三味線のない芝居の囃しと能の囃しとを、一つにしたようなものである。

僕は、次の狂言を待つ間を、Ｋとも話さずに、ぼんやり、独り「朝日」をのんですごした。

（大正五年七月十八日）

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房
1986（昭和61）年9月24日第1刷発行
1995（平成7）年10月5日第13刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：j.utiyama
校正：earthian

１９９８年11月11日公開
２００４年３月９日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。